鈴木 晴絵
SUZUKI Harue

あなたのための森/少年と海/透明人間 XXL /Like a Lake
銅版画、手漉き紙/銅版画、和紙/紙/コラグラフ、和紙

あなたのための森/少年と海/透明人間 XXL /Like a Lake

私の兄は言葉を話すことができない。兄は社会の規律を守ろうと行動するが、大概ミスをし、違和感がうまれ、カオスになり、兄は障がい者になる。
私は幼少の頃は、兄に特殊性を感じなかった。しかし、家族以外のコミュニティと関わる機会が多くなるにつれ、社会の少数派とよばれる立場にいることを理解していった。家族として、（言葉でコミュニケーションがとれるという点では）社会の多数派の一員として、兄の存在をどう理解したらよいか分からなくなっていった。
兄から目を背けるうちに、私自身が社会性を持つ年齢になった。その時に、ようやく兄と向き合い、解釈しなければいけないという思いに達した。なぜなら、兄の存在を意図的に無視した状態では、社会の中で私自身の存在や感性を掴むことができなかったからである。
兄から生じたイメージを基にした作品制作を始めた。当初は、現在の兄に姿になるべく直結しないモチーフを選んでいた。まず、立体作品“透明人間 XXL”では兄が着用している T シャツのサイズに注目した。型破りな兄だが、その体は規定された XXL のサイズに包まれている。1 人の人間の中で規律とカオスが入り混じっていることを、明確なモチーフと記号を用いて表した。
次の、“あなたのための森”では兄がよく着ている T シャツの柄に注目した。あるアウトドアブランドの一本のモミの木柄が印刷された T シャツである。その柄を描き、版におこし何枚か印刷してランダムに並べた。すると一本だけだった木は、木が乱立した森のイメージとなって現れた。そして、前作で主題だったサイズを表す記号は、この作品の中では銀色の装飾として使用した。私が作品の説明をしない限り、鑑賞者には兄の存在は見つからないだろう。版画の特徴である複製と、木というモチーフの選択が重なり合い、兄抜きでも成立する作品となった。
そして、最後に制作した“湖に浸かり水を浴びる男”は現在の兄の姿形をそのまま捉えることとなった。T シャツを脱いで水浴びをする兄をシンプルな技法の版画作品にした。ただ、兄には明確な形を持たない水が似合うということ、散々遠巻きに観察し勝手に解釈しようとしている存在は、人間の姿形であったとしても十分作品になるということに気がついたためである。
規律とカオス。規律があるからこそカオスは浮き彫りになり、カオスがあるからこそ規律が生まれる。これらの作品はこの仕組みを意識しながら制作を行った。明確な意味を持っていた記号は装飾的な模様となり意味を放棄したり、ただの模様だったものは別のイメージへと置き換わった。このやりとりこそが、私という存在と感性を使ってできることであった。このやりとりを今後も継続することで、さらに様々な事物の断片が混ざることになるだろう。作品という規律を保ちつつ、言葉では話すことができない私のカオスを表すことができるのではないだろうか。